2022年度春学期 グローバル教育プログラムの実施状況

新型コロナウイルス感染症の世界的流行による実施時の安全性や研修校での受入状況等を勘案し、大学主催のプログラムは20年度以降、全面的な渡航再開には至っていない。22年9月現在、長期留学は特別審査をもって渡航を許可、短期留学は原則オンラインでの留学プログラムの実施を継続している。

昨年度と比較すると、ワクチン接種のさらなる普及や死亡率の低下に伴う世界各国の対応軟化により、留学生受入や対面授業もコロナ以前の水準にほぼ戻りつつある。そのため、21年秋からの特例措置により渡航派遣を再開した交換留学については、22年秋も個別審査をもって渡航を認める形で、約250人の学生を30カ国に派遣している。対象学生には、各自で現地での注意事項等を調査しリスクの把握と対策を立てて申請することを義務付け、個別審査の結果、許可された場合に渡航可能とした。

一方、入国制限の継続や再導入が見られる国や地域もあり、今後についても依然として、自由な海外渡航が再開できる時期の見通しは立てづらい。留学希望者は、日本および滞在予定国の感染状況や治安面でのリスク、自身の危機管理対応能力の有無等も慎重に見極めながらの渡航留学の計画が不可欠であるとの自覚を持ってほしい。

短期プログラムにおいては、21年は全面オンライン型のプログラムを実施し、合計200人の学生が参加したが、今年は各国の渡航制限やコロナ対策の緩和に伴い、長期留学と同様に、個別審査をもって一部プログラムは渡航を再開した。22年夏期休暇中は海外短期語学講座3件、海外短期研修5件、実践型プログラム5件、海外インターンシップ科目1件に、計117人（うち渡航は39人）の学生が参加した。

また、今年の新たな取り組みとして、上智大学の設立母体、イエズス会の大学間国際ネットワークであるInternational Association of Jesuit Universities（IAJU）総会に学内選考を経て、本学から小倉夏子さんとマリャリ メグミ フェイス パヤヤさん（いずれも国教4）が参加した。2人は、昨年秋に立ちあがったIAJU Global Citizenship Programで世界中のイエズス会系大学の学生とともに「Global Citizenship」をテーマに、オンライン講義によりグローバル・ガバナンスや宗教、環境などを学んだ。プログラムの集大成として今年8月にボストンで開催された同総会に招待され、参加者間の交流を深めた。2人からは「プログラムへの参加でグローバル・シチズンシップの自覚を持つことの重要性に気づいた」との感想が寄せられた。従来型の語学、科目学習のための留学だけでなく、テーマ性を持った協働学習型の学び、さらには本学ならではのカトリックネットワークに基づく交流の意義が再確認された。

IAJU総会に参加し交流

体験談 交換留学 「イギリス・バーミンガム大学」

沼田晴（国教4）

2021年秋学期から1年間イギリスのバーミンガム大学に留学しました。1学期目はオンライン、2学期目に渡航する形を取りました。

留学開始当初はあまり情報がない中とても不安でしたが、大学や教授と積極的に連絡を取りながら授業に参加しました。渡航してからは感染症との共存を目指すイギリスと日本の感染症対策の違いに困惑しつつも、ブースター接種や国民保健機関によるアプリ等を活用して可能な限り感染対策に努めました。

留学中は主にヨーロッパ近現代史を学びましたが、併せて履修した国際関係に関する授業が特に強く印象に残っています。「学問としての国際関係学がいかに西欧中心であるか」や「国際関係において脱植民地化はなされているのか」など、ヨーロッパの多様性が反映されたトピックを深く掘り下げて考えました。日本でとは違った角度から世界について考えることができ、非常に貴重な機会となったと感じています。その他、世界各国から集まった素晴らしい仲間と出会い、お互いの文化を紹介したり言葉を教え合ったりもしました。コロナ禍での留学という特殊な経験となりましたが、多くのことを吸収できた留学生活でした。この経験を将来に繋げていきたいです。

体験談 海外短期研修 「カナダ・ビクトリア大学」

渡邉真由（外英1）

私はこの夏、カナダの西岸にあるビクトリア大学で短期研修に参加しました。

このプログラムではコミュニケーションや異文化理解など、国際ビジネスの基礎となる様々な分野について学びました。プレゼンテーションの極意も学び、その内容を踏まえた最終発表では複数大学で構成したチームで取り組み、新しいビジネスのアイディアを提案することが出来ました。授業や課題は密度も高く総じてアクティブなものが多く、特に現地の方に声をかけて行う「クリップチャレンジ」は、とても新鮮で刺激を受けました。

今回の海外研修は、コロナ禍の状況で不確定要素も多いなか、不安から一度は渡航をあきらめようかと迷いましたが、グローバル教育センターの担当の方の温かいアドバイスと家族の支援で、無事渡航することが出来ました。バンクーバー島の自然に恵まれた街並みの中で現地の方と交流を行い、自分の目や肌で感じられる貴重な経験を得ると共に、改めて文化の違いを実感し、自らのアイデンティティについても再認識する機会となりました。

今回渡航が出来たことに感謝しつつ、今後も大学での学びを深め留学等の機会にも積極的に挑戦し、社会に貢献する人材を目指して研鑽に努めたいと思います。

体験談 実践型プログラム 「東南アジアに学ぶA」

小西紗代（外独3）

私は実践型プログラムに参加しました。

プログラムではタイとカンボジアでの人的資本開発への取り組みを中心に、国際機関や現地政府の方々から、この2カ国の現状や目指す社会、それに向けて行われている取り組みなどについて講義を受けました。プログラムにはタイの大学生も参加しており、質問や感想をシェアするだけでなく、実際にその国に生きる当事者としてどう感じるかなど貴重な意見交換をすることができました。

講義では想像以上に詳細なプロジェクトや構想を知ることができ、特に今回学んだ2カ国は隣国かつ密接な関係にある一方で、それぞれ全く違う開発ビジョンや課題を抱えていることが印象的でした。私は教育開発に強い関心があるのですが、どういった経済発展、社会を目指すのか、若者やその家族が実際教育についてどう考えているのかを知ることで教育支援についてより具体的に考えることにつながりました。また包括的な教育開発プログラムなど日本が学ぶべきところも非常に多かったと感じます。

現地の生きた情報や実際に携わる方の思いを聞くことで、これから学びたいことがより具体的になりました。ここでの成果を今後の学修にしっかりとつなげたいと思います。

サマーセッションをオンラインで実施
10カ国の学生が2つのプログラムを受講

落語に笑顔がこぼれる

7月5日から21日の間、海外学生向けプログラムSummer Session in East Asian Studies及びSummer Session in Japanese Languageをオンラインで実施した。

East Asian Studiesでは、日本の文化、社会、経済、歴史などに関する5科目と、日本語基礎コースの計6科目が開講され、例年参加者が多い中国や米国以外にも、オーストラリア、シンガポール、英国など7カ国からの学生たちが連日受講した。一方、Japanese Languageでは、4つのレベルに分かれて集中的に日本語を学び、8カ国の学生たちが参加した。

また、課外活動では、落語家の立川志の春氏による英語落語やバーチャルキャンパスツアーをオンラインで実施し、本学学生と海外からの参加者が交流できる有意義な機会となった。

今回のプログラムには、ウクライナからの避難民として7月に来日した8人の留学生たちも参加。貴重な経験が得られたことを喜んでいた。そのほかのアンケートでも、「大変興味深い議論ができた」「講義の質が高かった」などの感想が寄せられ、好評のうちに幕を閉じた。

なお、海外学生向けに1月に開催するJanuary Session in Japanese Studiesについても、同様にオンラインによる実施を予定している。

グローバル教育センターからのお知らせ

【2023年春期休暇以降のプログラム募集について】

交換留学は10月6日に23年秋の渡航開始分の学内選考願書受付を終了した。今後、11月、12月の学内選考を経て、年内に派遣学生を決定予定。

23年2月、3月（春期休暇中）の海外短期プログラムは、語学講座、短期研修、実践型プログラムのうち複数プログラムを渡航で実施予定。10月中に各プログラムの説明会（対面）を実施、10月、11月に申込受付を行う。参加を希望する学生は、説明会に出席の上、検討してほしい。

グローバル教育センターからの情報は、Loyola掲示板を「留学」で検索すると確認できる。大学プログラムのお知らせをはじめ、海外の協定校からオンライン講座（上智での単位はなし、無料／有料）や、オンラインでの学生交流機会の案内なども、随時Loyola掲示板に掲出している。グローバルな学びに興味のある学生は、ぜひ定期的に確認してほしい。

【留学カウンセリング】

本学では常駐の留学カウンセラーが留学に興味のある学生を対象にカウンセリングを実施してサポートしている。1枠あたり30分の完全予約制で、本学学生なら誰でも利用可能。大学の制度に関する質問のほか、将来の留学に向けた疑問点や留学全般の相談も可能なので、積極的に活用してほしい。